

目次

泡沫人——うたかたびと——

序	章	……	5
第一章	十二月二十四日	雪玉	6
第二章	十二月二十五日	出会い	29
第三章	十二月二十六日(1)	冒険	51
第四章	十二月二十六日(2)	経験	99
第五章	十二月二十七日(1)	優しいモノ	137
第六章	十二月二十七日(2)	大きな夢	152
第七章	十二月二十七日(3)	温もり	181
第八章	十二月二十八日	暖かい雪	206
第九章	十二月二十九日(1)	唯一の希望	222
第十章	十二月二十九日(2)	大切なモノ	237
終章	笑顔	……	252



泡うた
沫かた
人びと



少年と少女

落ちこぼれた水……………	266
落ちこぼれた水……………	268
苦の道……………	270
こんな人になれたらいいな……………	272
毒の種……………	274
もの言わぬ優しさ……………	278
自由と明日……………	280
欠けてはいけない時間……………	284
誇れる自分がいてくれたら……………	288
何か一つでも夢中になれる物……………	292
薄れていく幸と強まる負……………	294
新たな一歩と次の一歩……………	296

序 章

冬の寒い日。

「ドン」

鈍い音が辺りに響いた。

周りの人達は何があったのかと、野次馬となり群がった。

人が車にはねられたのだ。

ぐったりとして地面にへばりついている。体からは血が流れ、雪にしみていく。その人に動く様子はない。

車の中から人が出てきて大丈夫かと声をかけている。

だが聞こえていなかった。その人は意識をさまよわせてゆつくりと目を閉じた。

第一章 十二月二十四日 雪玉

十二月二十四日。その日は雪が降り積もってとても寒い日だった。あたりは午後五時という時間でありながらも真っ暗。

町はずれの山のふもとにある中学校からあふれるように、生徒たちは集団になって帰路についていた。中学校は明日から冬休みなのだ。そして今日はクリスマスイブ。さらに冬休みの間にある明日のクリスマスと正月というビッグイベントを控えて、一緒に遊ぶ約束をしたり、二学期にあった出来事を振り返ったりと、下校時の道路は騒がしかった。生徒たちの浮かれた心を映し出し、その会話は賑やかというよりうるさいというレベルに達していた。

その騒がしい集団の後ろで傘を差した一人の少年が歩いていた。彼、大田恵輔は中学三年生。彼は中学最後の冬休みについていろいろと考えていた。だが思うように予定が立たず苦悩していた。

「何かないかなあ」

小さい声でつぶやいた声は周りの声でかき消されていた。恵輔は悲しいことに友達がそれほど多いわけではないので、友人と遊ぶ線は薄かった。

久しぶりに家族でゆっくり過ごしたいと思っていたが、それもなかなか難しい。恵輔の父親は学校の先生だ。冬休みの間テストの点数が平均点まで達していない生徒を呼んで勉強会を開いているらしい。そのためほとんど暇がない。いつもはあまり勉強のできない恵輔に無理やり教え込むような父親。そんな父親の勉強会に参加しなければならぬ生徒たちが可哀そうになってきた。

だがどちらにしても家族みんなで楽しむことはできない。母親が妊娠しているからだ。母は家庭を支える主婦だ。体が丈夫ではなく、妊娠が分かった時から母方の祖母がよく手伝いに来ている。この頃では腹部も大きくなって家の殆どを祖母に任せ、母は大事を取って休んでいる。出産も刻々と迫っているらしい。

とにかく今大田家はとても慎重なのだ。だから冬休みは一人で楽しむことになる。それに寒い冬は出かけるよりも家でゆったりしているほうが楽だった。ヒーターで温まっているのが一番。恵輔はやっと冬休みの楽しみといえるような出来事を思いついた。

気が付くと一人になっている。考え事をしていた時にリズムとなっていたでかい喋り声



が無く、辺りはサクツサクツと恵輔が雪の上を歩く音と、たまに自分を追い抜く車の音だけだった。ハアと白い息を吐く。その息はすぐに消えてしまう。何か物足りなくなってしまう。

歩くのがキラいな恵輔にとって登下校はかなり面倒くさかった。冷たい風や空気で手がかじかんでくる。こう寒くては、今なら熱された鉄板の上でジューツと焼かれてもいいとさえ思う。家に帰れば当分通学路を歩かなくていい。恵輔は改めて長い二学期を終えて冬休みを過ごせることが楽しみになっていた。顔に一瞬笑みが浮かんだ。

恵輔は傘を子供のようにつるつると少し回しながら鼻歌を歌い、家に向かった。目の前に家があると早く家に入りたくなる。だが疲れて走る気が失せ、早く家の中に入りたいたいという衝動を持ちつつ歩いていた。

そして自宅の敷地内に足を踏み入れ、

「はあ、やっと着いた」

と疲れのたまった声を漏らす。玄関のドアを開けたとき、とても開放感に包まれた。

「ただいまあ」

ハアとため息交じりの声でそう言って家へ入る。

「お帰り」

家の奥からゆっくりと祖母が顔を出した。家の中は暖房がきいていて暖かかった。「あゝ寒かった」

そう言っつてリビングに入りカバンをテーブルの上に置く。

「恵ちゃん、制服ちゃんと脱ぎなさい。風邪ひくかもしれない」

恵輔の制服は雪解け水でぬれていた。学ランを脱いで椅子に掛ける。

「婆ちゃん、俺のこと、めぐみちゃん、つて呼ぶのやめてくれない？」

恵輔は少しむっとしたように言う。

「なんで？」

祖母は驚いたような表情をする。

「なんか嫌なんだ」

「じゃあ、何て呼ぼうか、めぐみくん、けいくん、けいちゃん」

祖母は次々と呼び名の例を挙げていく。普通に恵輔と呼べばいいのに。祖母は名前が決まった時から最初の恵という字しか目に入っていなかったようで、ずっと恵ちゃんと呼んでいるのだ。聞き慣れてしまったが、「めぐみちゃん」という呼び方に嫌気がさす時がある。今日はそんな気分だった。

「でも今まで恵ちゃんって呼んできてるのを変えるのって変な感じしない？」

呼び続けた名前を変えようとするのは難しいが、やっぱりやめてほしい。

「普通に恵輔でいいよ」

「はいはい、分かったよ」

とても優しい声だった。今大田家はこの人の存在でとても助かっていた。

「母さんは？」

「寝室だよ」

祖母は恵輔の学ランについた水滴をはらいながら言う。

母の寝室は二階にある。恵輔は階段を上がり、母のもとに向かった。

「あら、お帰り」

ドアを開けると、母はベッドに起き上がってテレビを見ていた。

「ただいま」

母の声をきいたら、家に帰ってきたという実感が強くなり、声がオヤジくさくなってしまった。ああ、目の前のベッドにダイブしたい。

「調子どう？」

母は今、一日のほとんどを布団の中で過ごしている。なんとか中毒の傾向があり、安静にしとかないけないらしい。気は強いが体はあまり強いほうではなかった。

「うんまあ、今のところ何ともないかな。赤ちゃんも大丈夫」

恵輔は母の腹を少し見てフーンと返事をした。

「明日から冬休みでしょ？」

「うん、そうだけど」

「クリスマスプレゼント何がいい？　なんか買ってあげようか？」

「いいよ、別に欲しいものなんてないし」

プレゼントのことより、自分の体のことを気にした方がいいのではないだろうか。恵輔は母のお腹が気になったままで、曖昧模^{あやまも}糊^もな返事をした。

「それにそんな暇ないだろ。たしか今年中に産まれるとかいつてなかったっけ」

恵輔は母のベッドに座る。

「まあたしかに今年中に産めたらなって思ってるけど」

母は自分のお腹をさする。

「出産予定日っていつ？」

「言っただけだったっけ」

「聞いてないよ」

それに恵輔は妊娠したということも直接聞いていなかった。

「十二月二十八日」

これには恵輔もかなり驚いた。

「年末ぎりぎりじゃない」

年末ぎりぎりだし、あと数日に迫っている。えーっと今日が二十四日だから……と頭の中で軽くパニックを起こしていたら、母が妙な質問をしてきた。

「で感想は？」

「何の？」

「お兄さんになる気分は」

「別にどうもしないけど」

「下ができるのってなんかわくわくしないの？　どんな子が産まれるのかとかさ」

母は恵輔の返答に少し期待していたようだったが、あきれるように言った。

「いや、あんまり」

本当は興味がない。というよりあまりよく思わない。

「お兄さんって頼られる存在じゃない。きつとかわいいと思うわよ」

母の声にはからかいの色が交じっている。

「どうせ憎まれ口たたかれるだけだよ」

著者プロフィール

天ノ川 瞬 (あまのがわ しゅん)

石川県在住の高校生。

次回作を構想中。

イラスト担当・希

泡沫人 — うたかたびと —

二〇二二(平成三十四)年十二月二十五日 第一版第一刷

著者 天ノ川 瞬

発制
売作 北國新聞社

住所 千九二〇一八五八八

金沢市南町二一

電話 〇七六(一六〇)三五八七(出版局)

E-mail syuppan@hokoku.co.jp

©Syn Amnagwa 2012. Printed in Japan
ISBN 978-4-8330-1915-6